零崎常識の人間心理

三木拓矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
零崎常識の人間心理

【Ｎコード】
Ｎ２３３０ＢＡ

【作者名】
三木拓矢

【あらすじ】

「零崎一賊」―それは殺し名の第三位に列せられる殺人鬼の一賊。
寸鉄殺人こと零崎常識。
零崎一賊の中でもっとも有名な爆熱の殺人鬼。
これはそんな彼と、妹の物語。

新青春エンタの最前線がここにある！

私は今、何を見ているのだろう。
私は何を知ったんだろう。
人がいない工事現場で、私は出会った。
出会って、しまった。
ドガーン。
と、私が内心でそんなことを思っている時、もう何度目か分からない爆発音が聞こえる。
ドガーンって。
なんだか文体で見るとデフォルメされた感じで可愛い響きに見えるけど現実はとんでもない。
爆発音がしたところは大きな砂煙が舞い上がり後には何かの残骸しか残らない。
ただのチリのみである。
たった1人を除いては。

「ハハッ、ハハハハッ！」

先に言っておくけれどこの笑いは私のじゃありませんからね？
周りがどんどん爆発してるのに笑うってどんな鬼よ。
私はあの人と違って鬼ではない。
そして、鬼にはならない。
つーか笑い方怖いっす。

「アハハハハッ！アハッ」

彼はひたすら笑う。　誰もいない、私と彼以外誰もいなくなった

工事現場で笑う。
笑い声と爆音だけが支配する。
「ウフフ！ウフフ！ーーーー」
一瞬笑いが止まったが何かあったんだろうか？
こっちからだと何も見えないし何も聞こえないから彼に何がおきてるか全くと言っていいほど分からない。
……あれ？もしかして私今だったら逃げられるんじゃない？
こんな非日常から抜け出して今まで通りの日々に戻れるんじゃない？
平和で平凡な世界に。
「おいおいお嬢ちゃん可笑しなこと言うなよ。思わず笑っちまうじゃねえか、ハハハハッハハハハッハハハハッ」
と気付けば彼はそこにいた。
私の目の前に。
爆音も、何時からか止まっていた。
あー、どうやら私は逃げ出す機会を逃してしまったみたいだ。
次の機会まで待つとしよう。
私は結構前向きなのだ。
「笑い声うるさいです鬼いさん」
私に鬼いさんと呼ばれ彼はちょっと驚いた様な顔をした。
笑顔は崩さないままだが。
笑顔というかニヤニヤ顔か。
「お嬢ちゃんなかなかどうしてどうして、鬼いさんだなんて。ま

るで俺たちの為にあるような言葉じゃないかよ。まだ自覚もないってのにそんな言葉がでるなんてセンスがいい子だねえハハハハッ」

俺たちの為の言葉？　自覚もないのに？

一体この人は何を言っているのだろうか。

頭がおかしいんじゃないだろうか？

……いや、爆発の中高笑いしてるような人の頭がまともなわけないか。

「俺が何を言ってるか分からないって顔だな。まあごもっともだわ。急に爆発の中高笑いで登場する人間なんてわけが分からないだもんな。うんうん。ハハハハハハハハッ」

自分で思ってんならちゃんと事情を説明してほしい。

ってか笑い過ぎ。

どんだけ笑うんだ彼は。

「いやね。別に理由はなかったんだけどさ、やっぱり爆弾魔の初登場ってのは派手にいきたいじゃん？ハハハッ」

爆弾魔のポリシーなんか知らねえよ。

1人で勝手にやってろ。

「あんたの命を助けてやったろう？初登場で爆発の中敵を倒して登場。たまにはヒーロー気取りも悪くないアハハハハッ」

むぐ……。

それを言われると。　確かに殺されかけたところを助けてもらったけど。

「現実逃避でもしてんのかあ？お嬢ちゃんの目の前で人が爆発した。そして俺が爆発させた。たとえお嬢ちゃんを殺しかけた奴とはいえ人間だぜ？そいつを俺が殺したんだぜ？それなのにお嬢ちゃんはその事をあまり気にしていないだろう？その時点でお嬢ちゃんは狂ってんのさ。道を踏み外しちまってんのよ。異常者よ異常者。そんな奴が今さらどこにだって戻るとこなんかねえよ。そうだろ？お嬢ちゃん」

「……」

言い返す、べきなんだろう。

命を助けてくれたからと言って、なんで私が初めてあった人に、いや人殺しの鬼、見知らぬ鬼いさんにこんな事を言われなくちゃいけないんだろう。

異常な鬼に異常だなんて、言われたくない。

私は普通だ。

まともな、人間だ。

……でも反論出来ない。

言い返すことが、出来ない。

実際そう思ってしまったから。

「まあそんなに悲しい顔すんなって、何もお嬢ちゃんを凹ませようなんてそんな鬼畜みたいなこと言った訳じゃないのさ。ついでに今のは鬼いさんだけに鬼畜とかそういうことじゃないからなアハハハハッ」

別にうまいことは言えてない。

むしろ下手だよ。

「なあお嬢ちゃん」

そんな私の言葉を無視して彼は言った。
今考えるとこの鬼に出会ったしまった事が私の人生、いや鬼生のターニングポイントだ。
オーニングポイントかもしれない。
……すっかり彼のが移ってしまった。
ああいう風にはなりたくないとは思ってもやはり家族、妹という生き物は鬼いちゃんに似てしまうのか。
いや、今はどうでもいいか。
なんだか妙に伏線っぽくなってしまったのも軋識鬼いちゃんに似たと思えばしょうがない。
ともかく。

「お互い道を外れた者同士、家族にならないか？ハハハッ」

零崎常識。
常識鬼いちゃんに出会い零崎に誘われ、私が人から殺人鬼としての禍々しいスタートをきろうとしていたのは、奇しくも６月２３日。
私の誕生日であった。

（後書き）

あけましておめでとうございます。

新年早々勝手してます三木です。

細かいことは言いません

今年もよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2330ba/

零崎常識の人間心理

2012年1月5日22時50分発行